



# コルネリオ会

(防衛関係キリスト者の会)

ニュースレターNo. 144

2017年4月



## 家族の軌跡 (ファミリーヒストリー)

コルネリオ会 会員 圓林栄喜

### 1 平和の礎に刻まれた祖父

NHKで「ファミリーヒストリー」という番組がある。著名人の家族の歴史を本人に代わって取材し本人に紹介してくれる番組である。

この冬、私のファミリーヒストリーともいふべき小旅行をした。母方の祖父の名が刻まれた沖縄の平和の礎を母とそして私の家族と訪問した。

平和の礎に母方の祖父の名が刻まれたのは2004年(平成16年)である。経緯を確認すると、軍人であった祖父は予備役であったが、召集され沖縄戦に参加することになったようである。ところが、沖縄戦に参加する途中に祖父が乗っていた船が火災で沈んでしまい、逃げ遅れたか脱出できなかったかが理由で亡くなった。このため沖縄戦で直接亡くなったわけではなかったため遅くなったようである。平和の礎には24万名を超える方々の名前が刻まれている。故郷の墓でみる祖父の名前が確かにそこには刻まれていた。祖父の顔は写真でしか見たことはない。母は3人姉妹の末っ子で戦争未亡人の祖母を助け懸命に働いた。戦死ではなかったせいか、軍人恩給の支給も周囲の同様の境遇の方々に比べると遅かったと母はいつていた。決して裕福な生活ではなく、2人の姉は中京地区に嫁ぎ、残された体の弱い母の面倒を見るため、結婚など考えることもなく父と出会ったようである。父はそのような母の状況を理解したうえで結婚を申し込んだ。結婚後母方の祖母は心臓が弱く長い入院生活から特別養護老人ホームに入所する。物心ついたころにはベッドの上の祖母しか記憶には残っていない。

### 2 バンコクで終戦を迎えた祖父

父方の祖父は徴兵で、山砲部隊の兵士として中国武漢からインドシナ半島を延々と歩き、バンコクで終戦を迎えた。復員後は山を開拓してみかんを栽培し、父とともに農業に従事した。時おり、近所の戦友と昔話に花を咲かせ、戦友会に出かけていく後姿を覚えている。防大に入ってからであるが、帰省の折によく戦争当時の話を聞き、なつかしように話してくれた。父が交通事故で亡くなったときは、まさか息子が先に死ぬなど想像もしていなかったと思う。しかし、半年後に我々家族が異動で1年半と言う短期間ではあったが、実家の近くに住むようになり、母、祖母も含め非常に近い関係になった。おかげで、子どもたちは毎年の帰省を楽しみにしてくれている。

### 3 神の絶妙な計画

さて、平和の礎に刻まれた母方の祖父の名前を見つめながら、別の思いが湧き上がってきた。

もし、母方の祖父が元気に沖縄から帰ってきたら、自分はこの世に生を受けていただろうかと。もし父方の祖父が戦死していたら、自分はこの世に生を受けていただろうかと。



平和の礎にて (家族で)

さらに、もし父が交通事故で亡くならなかったら、このような機会が与えられたらどうか。実に人は

父母から生まれ、父母もまたその父母から生まれ、それぞれが体験する様々な出来事の中で脈々と命が受け継がれる。

戦争によって失われた命もあれば、戦争がなければ生まれなかった命もある。我々の人生はやはり神の絶妙な計画の中で進められ、またいつ、だれが、どのように神に出会うかも絶妙なタイミングであることを改めて感じた小旅行であった。この世に生を受けた者は自分の身に起こる出来事を偶然でかたづけすることなく、その家族の様々な思いを胸に、その瞬間、瞬間を誠実に歩むべきではないだろうか。

#### 4 聖書に見るキリストの系図

旧約聖書のルツ記でナオミがモアブの地からベツレヘムに戻り、ルツが落穂拾いに出かけた畑が「はからずもエリメレクの一族に属するボアズの畑のうちであった。」と記されている。

異邦人のルツが、イスラエルの地に導かれ、その末裔がイエスであることは新約聖書のマタイの福音書が記している。その系図の中には、ルツとボアズだけでなく、ユダとタマル、ダビデとウリヤの妻バテ・シェバなど現代でもスキャンダルになるような人々も含め、様々な人物がイエスの誕生までに名を連ねる。壮大なファミリーヒストリーがそこにある。何故そのような人々がイエスの誕生に関係す

るのか。榎本保郎師の「一日一章」には「この系図の中に、福音そのものが証されている。数の中に入ることのなかった人、自分が過去に犯した汚名がいつまでも消えず、その汚名の中に滅んでいかなければならないような人が、イエス・キリストのゆえに光栄あるものとされるのである。」とある。最悪の事態が最高の榮譽に変わるなど人間には理解できない。しかし、あえて神はそのような計画を立てられたのである。

#### 5 与えられた人生に感謝

一度しかない人生である。嬉しいこと、楽しいこと、悔しいこと、悲しいことすべてがあり、誘惑もあり、失敗も成功もある。そのすべてで私の人生であり、神が与えてくださる時なのだ。クリスチャンになったことで、人生の受け止め方が変えられたことは感謝である。

神の緻密な計画を信じ、出会いを大切にするとともに、いつもその導きに感謝する者でありたいと思う。

「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべてのことについて感謝しなさい。これがキリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。」Ⅰテサロニケ5:16~18

## ピューリタンについて (その2) ピューリタンの特色

コルネリオ会会員 長濱 貴志

前回の投稿では、ピューリタン運動の概要を歴史上の出来事を中心に整理した。今回は、ピューリタンの特色について整理してみたい。

前回のピューリタン運動の概要において触れたように、カトリックの形式主義、権威主義に不満を持ち、聖書の教えに立ち返ろうとした群れは大陸に亡命した。そこで、彼らは大陸での宗教改革が見事に進展したことをつぶさに見た。そこで英国でもその改革を期待しつつ戻ったが、英国国教会が宗教改革においてカトリックの残滓を残していたことに満足できず、純粋化すなわちピューリファイしようとして立ち上がった。ピューリタンという名はこのような運動の動機に由来している。カトリック要素の何がいけな

いというのか。何を目指したのかを考えながら二つの側面から特色を考察したい。

### (1) 礼拝的側面からの見た特色

#### ○ 聖書的礼拝

彼らは、聖書的礼拝を求めた。カトリックの礼拝には、魂の救済に繋がるどころが少ないと見たのか。権威主義、形式主義への批判及び免罪符等救済手段への疑い等があったと思われるが、ピューリタンは礼拝の原理が聖書の教えに忠実となるように、カトリック的要素を排除する。

ウェストミンスター小教理問答に見られるが、「唯一の神を礼拝し、その他の偶像を崇めない事、唯一の神に栄光を帰すること」を戒めとしている。

また、「人生の目的は、神に栄光を帰すること。神を永遠に喜ぶ事」としている。これらから、人生の目的は、礼拝において唯一の神を崇め、礼拝し、神に栄光を帰することとなる。

そして、使徒2：41-42にあるように、「教えを堅く守る」、「交わりをする」、「パンを裂く」、「祈る」ことが初代教会からなされてきていた。これを礼拝に関する聖書の教えと捉え、次の6つを実践する事が大切にされた。①聖書の言葉を講解する説教、②聖餐式・洗礼式などの聖礼典、③賛美④祈り⑤教育（カテキズム）⑥信仰的訓練である。特に魂の救いに繋がる①②④を大事にした。

祈りについては、決められた言を口に出して祈るのではなく、自らの想いを自由に口にして祈ることが許される。

説教について言えば、聴衆は礼拝に出席するにあたり生活における適用が求められる。聖霊の導きによる聖書の理解と生きることへの適用を求めて礼拝に臨み、生活に戻って行った。そして、聖書の教えの日常生活への適用と実践することが礼拝に出席し、聖礼典にあずかる前提ともなった。

これらの考え方及び礼拝での信徒の態度は、私が集っている教会が実践している事であり、身近なことである。

## (2) 信仰的態度の側面から見た特色

### ○ 黙従的信仰の否定

## 米国ワシントンDC訪問記—岐路にあるキリスト教大国—

会員 関 博之

平成29年2月20（月）から3月3日（金）までの間、米国の首都ワシントンDCに滞在しました。今回の渡米は自ら計画し、少額ながら研究助成金をいただきながら実現できたものでした。本稿ではクリスチャンの視点から、米国訪問の感想についてお話しします。

これは米国全般にわたって言えることなのですが、ワシントンDCは、法律や規則があるわけでもないのに、人種や階層ごとの「住み分け」が顕著な都市でした。白人、黒人、外国人が住むエリアが、それぞれ何となく決まっているというような感じです。教会についても、白人エリート層が通う教会、黒人が通う教

黙従的信仰とは、信者が司祭等階級上位者の教えに唯々諾々と従うという事である。当時、聖書は一般人に対しては入手困難であり、その聖書を自分自身の力で読み解くことは困難であった。教える側に圧倒的なアドバンテージがあり、しきたりに倣う事は普通であったろうと思う。この黙従の意味するところは、権威にすがる信仰を上から強いられること、そして救済がその権威に服従するところにあると信じ込む平信徒の相互依存関係のことである。ピューリタンは、この絶対的な相互依存関係を克服していくところに特色がある。これは、信徒が牧師同様の信仰に訓練されていくところまでも追求する事になる。

以上二つの側面から見てきて、ピューリタンは聖書、精霊による力を得て、礼拝様式、信仰的態度を常に変革することを名前の由来通り進めてきた。彼らの礼拝様式及び信仰的態度を受け継いでいる我々現代プロテスタント信仰者は、この力を社会の様々な分野に発揮し今も改革を推進する原動力となりうると言えないだろうか。

ピューリタンに関する考察、そのために参考とする分野は深く広い。今後も学びを継続して、紹介していきたい。

会、ヒスパニック系が通う教会、日本人用の教会まであり、互いに干渉しないことを暗黙の了解としているようでした。日本のクリスチャンがこれを聞くと、何となく冷たいというイメージを持つかもしれませんが、彼らにしてみれば自分と似たような境遇の者が集う教会を選択できるというメリットがあるようです。そもそも米国の歴史を見てみると、プロテスタントとカトリック教徒たちの衝突、黒人に対する差別、移民に対する偏見など、「多様性」(diversity)から起因する問題と常に背中合わせでした。住み分けは多様性の中での平穏を保っていくための知恵だっ

たのかもしれませんが。そのような環境下で、米国をひとつにまとめているのが、1ドル札紙幣に「神の名のもとに」(In The God We Trust)と書かれていることから分かるように「宗教」であり、その意味で、米国はキリスト教大国であるとも言えます。「住み分け」と「宗教」のバランスが米国の秩序を保っている重要な要素なのです。

さて、私が帰国する前日の3月2日に、毎年恒例の国家朝餐祈祷会(National Prayer Breakfast)がワシントン・ヒルトンホテルで実施され、トランプ大統領とペンス副大統領が政権発足後、初めてこれに参加しました。トランプ大統領は宗教団体が政治活動をした場合は税制優遇措置を中止する法律(いわゆる『ジョンソン条項』)の撤廃、ペンス副大統領は自身の職務指針聖句として、エレミヤ書第29章第11節を掲げてみせるなど、トランプ政権は明らかに宗教団体寄りの姿勢を見せたと、米国内のメディアは一斉に報じました。私はこのニュースを現地で聞いたとき、複雑な想いがしました。というのは、米国で宗教団体が政治的な力を持つようになると、国内の秩序を担ってきた(政治と宗教の)「住み分け」と「宗教」のバランスに変化が生じることが予測できたからです。神は米国を何らかの形で変えるご計画をお持ちなのだなど、この時、強く感じました。ただそれが良い方向に行くのか、悪い方向に転ぶのかは、現段階では予測不可能です。その意味で、米国は現在、岐路に立つキリスト教大国になっているのだと思いました。

岐路に立つ米国は、同盟国である日本にとっても他人事ではありません。そしてそれが日本にとって良い方向に行くのか、悪い方向に転ぶのかも、現段階では全く分かりません。しかし、我々クリスチャンがすべきことは明確です。それは「祈る」ことです。聖書に「こうしてペテロは牢に閉じ込められていた。教会は彼のために、神に熱心に祈り続けていた」(使徒の働き第12章第5節)と書かれてあるとおりです。米国のために、そして米国にいる兄弟姉妹のために祈ることが、今の我々にとって最も大切なことなのだと思います。あとは主に委ねるのみです。

米国は今、主のみ手によって大きく変えられようとしています。わずか10日間ほどの滞在でしたが、そう

確信することのできた、本当に有意義な渡米でした。

## 2019AMCF 東アジア大会に向けて

～アンケートへの協力依頼～

2019年にAMCF東アジア大会を開催するべく検討を始めました。東アジア大会の日本での開催は1986年(市ヶ谷)、1995年(池袋)、2002(市ヶ谷)、2010年(成田)に引き続き5回目になります。

今回は努めて多くの防衛関係キリスト者が参加できるように日程と場所を検討しています。時期については8月13日～15日のお盆の時期もしくは9月3日～5日のいずれかで検討しています。

場所については、日光、成田、横浜等が候補になっています。日光は「オリーブの里」、成田は前回実施した「マロウドホテル」、横浜は現在調査中です。都内は空港からのアクセスは良いのですが、経費的に満足 of いく施設がないのが現状です。

国内の参加希望状況を踏まえ開催規模、時期、場所を早めに決定したいと考えております。つきましてはコルネリオ会ホームページ

「<http://jmcf.s302.xrea.com/index.html>」にアクセスの上、「2019年AMCF東アジア大会アンケート」欄をクリックし、パスワード「2019」を入力してアンケートに回答ください。締め切りは2017年5月31日までとします。ご協力よろしく願いいたします。

編集子

### 献金感謝 (2016.12.1-2017.3.31)

いつもコルネリオ会を覚えていただき感謝致します。  
中岡一秀、松山暁賢、今市宗雄、矢田部稔、  
西澤邦輔、滝口巖太郎、谷 二郎、玉井佐源太、  
河野行秀、圓林栄喜・さゆり、石井克直、芝 祐治  
木下真由美、加瀬典文、長橋和彦、常盤 一崇、  
石川信隆、廣田具之